

富山県の家と村

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 町田賢一

建物の変遷

弥生時代を4時期に分け建物を中心に県内の弥生時代の集落様相を概観したい。

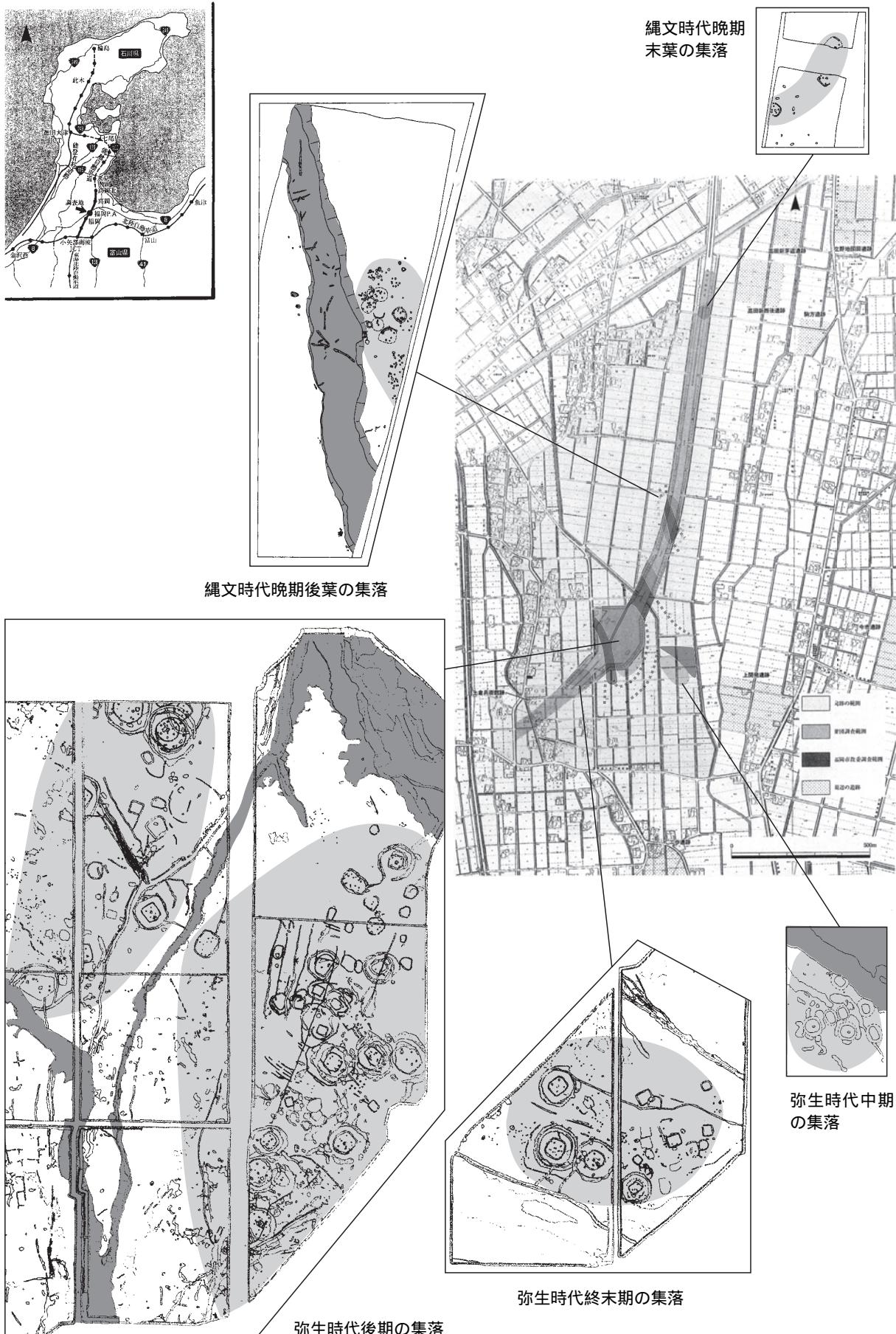
縄文時代晚期後葉～弥生時代前期 建物は、縄文時代以来伝統的な竪穴住居を主体とし、これに掘立柱建物が共存する。富山市古沢A遺跡で竪穴建物とみられる竪穴状遺構・柱穴状ピット群や巨大柱穴群、富山市開ヶ丘狐谷中山I遺跡で竪穴建物が1棟みつかっている。下老子 笹川遺跡では、自然流路の岸辺に晚期後葉の建物14棟と晩期末葉の3棟からなる集落がみつかっている。遺跡の立地は、扇状地扇端部や丘陵裾部に集落がつくられる。なお、弥生時代前期は、大境洞窟がある程度である。

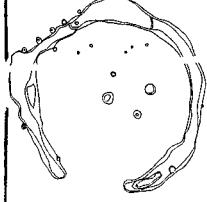
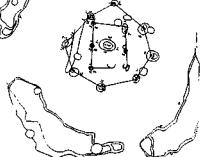
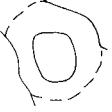
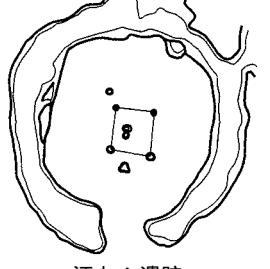
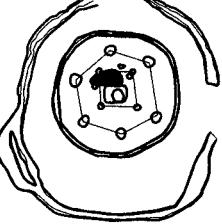
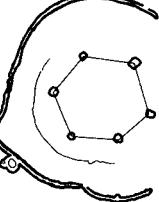
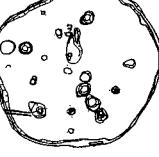
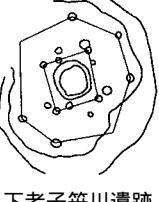
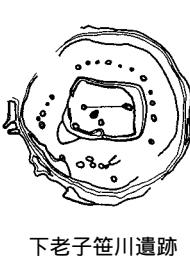
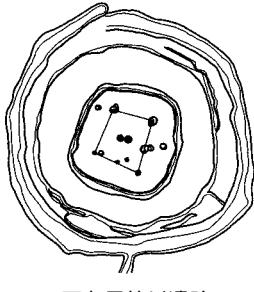
弥生時代中期 中葉から集落が構成される。建物は、「周溝をもつ建物」が出現し、射水市高島A遺跡・高岡市石塚遺跡・下老子 笹川遺跡で2棟ずつ、黒部市堀切遺跡で1棟など県内各所で検出され、この時期には普遍的な建物と言える。遺跡の立地は、県西部を主とし、砺波平野の庄川扇状地扇端部、射水平野の旧放生津潟縁辺部に集落がつくられる。県東部は数少ないが、近年の調査で黒部市に堀切遺跡が見つかっており、今後資料の増加が見込まれる。

弥生時代後期 前時期に比べ遺跡が激増する。「周溝をもつ建物」は、上市町江上A遺跡・江上B遺跡・魚津市佐伯遺跡で1棟ずつ、下老子 笹川遺跡で20棟、氷見市上久津呂中屋遺跡で3棟などがみつかっている。これらの遺跡では、竪穴建物や掘立柱建物が付随し、建物の構造でその用途を変えていたものとみられる。この他に魚津市湯上B遺跡や氷見市稻積天坂遺跡などのように竪穴建物のみからなる集落もあり、前者とは異なる集落の性格が伺える。遺跡の立地は、前時期が低地を主体としていたのに対し、台地や丘陵上にも集落がつくられる。県西部では、庄川扇状地扇端部や沖積地などの低地が多い。県東部では、常願寺川扇状地扇端部・沖積地・丘陵先端などに集落がつくられる。

弥生時代終末期 遺跡数は前時期とほぼ同数であるが、建物は「周溝をもつ建物」が下老子 笹川遺跡と小矢部市下川原遺跡のみでこのほかは竪穴建物が主体となる。竪穴建物は、富山市南部I遺跡・小矢部市平桜川東遺跡で1棟ずつ、富山市富崎遺跡・鍛冶町遺跡で3棟ずつ、富山市打出遺跡・射水市中山南遺跡で9棟ずつなどがみつかっている。またこの時期から環濠集落（富山市新堀西遺跡・射水市日宮城跡など）や高地性集落（魚津市天神山城跡・富山市白鳥城跡など）が出現する。遺跡の立地は、前時期同様県内各地各所に集落がつくられる。一般集落は富山平野・射水丘陵・砺波平野など、環濠集落は沖積地および低丘陵、高地性集落は丘陵頂部につくられる。

まとめ 以上のように富山県では、中期中葉以降建物を伴う集落がつくられ、扇状地扇端部など低地部に展開する。後期になると、遺跡が激増し、扇状地扇端部や沖積地を中心に県内各所に集落が営まれる。終末期には、扇状地扇端部などの低地部に加え丘陵部にも集落が営まれ、戦時下にあるためか環濠集落や高地性集落が誕生する。このように各時期で集落の様相が異なり、弥生時代を通して集落が営まれる遺跡は数少ない。こうしたなかで下老子 笹川遺跡は、遺跡内で地点を変えながらもほとどの時期の建物もあり、県内の弥生時代の集落様相を考える上で非常に貴重な資料になるであろう。



	周溝をもつ建物	豎穴建物
縄文時代晚期～弥生時代前期		 開ヶ丘狐谷中山I 遺跡  古沢A 遺跡  下老子 笹川 遺跡  下老子 笹川 遺跡
弥生時代中期	 高島A 遺跡 (焼失住居)  石塚 遺跡  高島A 遺跡 (焼失住居)	 下老子 笹川 遺跡  下老子 笹川 遺跡
弥生時代後期	 江上A 遺跡  下老子 笹川 遺跡 (焼失住居)  佐伯 遺跡	 稻積天坂 遺跡  下老子 笹川 遺跡
弥生時代終末期	 下老子 笹川 遺跡  下老子 笹川 遺跡	 打出 遺跡 (焼失住居)  平桜川東 遺跡 (焼失住居)

第2図 富山県内の建物変遷図 (1/500)